

monthly JŌDO

2011

12



法然上人讃仰会

嵯峨上人を歩く

二十五霊場十七番

嵯峨二尊院

◆御詠歌◆

あしびきの
山鳥の尾の
しだり尾の
永々し世を
いのるこの寺

どうぞ戦乱動乱天災なき清き平和な世の中が永く続きますよう、御守りください。
南無阿弥陀仏

2011年表紙 雲中供養菩薩（東京白金・戒法寺蔵）

仏師 鎌田光昭

浄土

2011/12月号 目次

「苦」の原因をたずねる	阿満利磨	2
法然上人を歩く 二尊院	高橋良和	9
会いたい人 白井晃さん②	関 容子	12
江戸を歩く	森 清鑑	20
響流十方	林田康順	26
小説渡辺海旭	前田和男	30
法然上人をめぐる人々	石丸晶子	36
Jフォーラム		43
誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネツ	かまちよろう	47
編集後記		48

表紙裏・法然上人を歩く+表紙の人

背表紙裏・法然上人を歩く 二尊院



表紙題字=中村康隆元浄土門主
 アートディレクション=近藤十四郎
 協力=迦陵頻伽舎

苦

の原因をたずねる

現代における
仏教の可能性

阿満利磨

明治学院大学教授

最近、必要があつて竹山道雄の『ビルマの堅琴』を読み返した。『ビルマの堅琴』は戦後日本文学の傑作の一つとして映画やドラマにもなった。内容は、戦時中ビルマ戦線に送られた日本兵・水島上等兵が戦火の中で捨て置かれた多数の日本兵の屍を見て小隊を離脱し、ビルマ僧となつてその鎮魂慰霊を余生の使命とする、というものだ。

死者、とりわけ無惨な最後を迎えた人々に対して特別の思いをもつて弔いたいと願うのは人情であろう。だが、それが「仏教」だといわれると私は強い違和感を覚える。「仏教」は果たして死者の鎮魂慰霊を本質とする宗教なのであるか。

『ビルマの堅琴』にもどつていえば、水島上等兵が戦友の鎮魂慰霊のために出家したからといって、小説全体が仏教の教えにしたがつて展開されているというわけではない。なぜならば、仏教は「苦」からの解放をめざす宗教であり、そのためには「苦」の原因を明らかにし、その原因をとりぞく努力をせよ、と教えるからだ。つまり、出家した水島上等兵は、戦友の鎮魂慰霊もさることながら、それ以上に、なぜ多くの人々が戦死という悲惨な最期を迎えねばならなかったのか、その原因を明らかにし、その原因が日本の軍国主義にあることが分かれれば、そのような国家を再び生み出さないような運動に関わつて生きてゆくことを目指すべきではなかったのか、ということだ。

だが、作者の竹山道雄にはそのような仏教理解はなかった。いや、竹山だけではなく、多くの日本人がいだく仏教のイメージは、死者の鎮魂慰霊の範囲を出なかったし、今も出していない。

今回、編集部から与えられたテーマは「東日本大震災にどう向かい合うか―仏教の課題と可能性」である。このテーマに即して考えを進める上で、私はどうしても仏教を一度死

者の鎮魂慰霊の宗教から解放する必要があると考える。

*

さきへのべたように、仏教は「苦」からの解放を教える宗教である。その「苦」とは、人生には楽しいこともあれば苦しいこともあるという、相対的な苦しみをいうのではない。苦・楽、幸・不幸をふくめた人生そのものが絶対的に「苦」だということである。

もっとも、人生や世界が絶対的に「苦」だという教えは、現代人には簡単に受け容れられない。多くの人は、人生には苦しいこともあるが楽しいこともある、あるいは、絶望だけが人生ではなく希望もあるのが人生だ、とたちまち反論する。だが、人生の営みをよく見つめると、「苦」がその本当の姿だということが了解されるはずだ。人生が「苦」だという教えをどのようにすれば了解できるか、ここではこれ以上はふれない。ただ、人生が「苦」だという自覚がなければ、仏教の門は開かれない。

今、私が問題としたいのは、その上でのことなのである。つまり、どうすればその「苦」から解放されることができるのか、ということだ。仏教は、そのためには「苦」の原因を徹底的に追及せよと教える。いうまでもなく、「苦」の原因が分かれば、それを取り除くための手段、方法も明らかとなる。大事なことは、「苦」の原因を明らかにするということにある。

今までの仏教は、「苦」の原因は個人の煩惱や無知、愚かさにあると教えてきた。しかし、近代に入ってから国家の力が強大になり、社会の組織が複雑になるにしたがい、国家や社会のあり方が人々の暮らしを大きく左右するようになる。そうになると、「苦」の原因もたんに個人の欲望や無知、愚かさにあると言いきることはむずかしくなってくる。

そのよい例が戦争だ。戦争は個人では起こすことができない。国家と国家が起こすのが戦争だ。たしかに国家を経営するのは特定の個人である。その個人の欲望や無知、愚かさが国民を戦争に駆り立てるということには間違いはない。だが、近代（現代）の戦争は、政治的・経済的な複雑な要因がからみあつてはじまる。支配者たちの個人的な欲望や無知、愚かさに還元しつくすことができない。愚かさが組織化され巨大化するのだ。個人では容易に手に負えなくなる。そのために、現実をあきらめるのが宗教であるかのごとき考えが宗教家自身の口からも発せられ、世もそれを受け容れようとする。

*

仏教の基本は「苦・集・滅・道」の四つの真理からなる。「集」とは、「苦」の原因のことであり、「滅」はその原因がなくなつた状態、「道」は「滅」にいたる方法をいう。この図式で右のことを再度言えば、今までの仏教では「苦」の原因である「集」は、個人の煩惱や無知、愚かさに求められていた。その煩惱や無知、愚かさを克服するために数々の修行が生まれ、出家者たちはその修行、つまり「道」を實踐して「滅」の実現を目指してきたということになる。

だが、すでにのべたように、現代の苦しみには社会や国家のあり方が深くかわつてゐる。そのことに気づいた一人がベトナム僧のティック・ナット・ハーンであつた。彼はベトナム戦争下で、人々がこうむる苦しみは、米・ソという国家の争いに起因していることに気づく。ハーンはその原因を断とうとして、アメリカ政府の責任ある者たちに、戦争の即時中止を直接要求する行動に出た。また、ハーンたちは僧院から出て戦時下の民衆の苦しみをともして、南ベトナム政府に停戦を求める民衆運動も起こしたのである。

アイエムが目指す 「寺院ルネッサンス」活動

日本人の心があふない！
そう感じたとき、寺院と周縁のはざままで活動する私たちアイエムに、ひとつの気づきがありました。
「寺院とは地域の人々の“苦”と向き合い“学び・癒し・楽しみ”があり、人々を元気にしてくれるところでなければ」。このような寺院と周縁の間に新しい信頼関係を築く支援活動が、寺院ルネッサンス活動なのです。
今、アイエムでは寺院から地域・周縁への各種文化発信行事の開催を支援致しております。
ご要請があれば協力させていただきます。



お宝鑑(二例)

創業 30年 周縁と寺院を結ぶ
株式会社 **アイエム**

東京都中央区京橋 2-8-1 八重洲中央ビル
Tel. 03-3535-5555 Fax. 03-3535-2730
インターネット **アイエム** で 検索

ハーンは、自らの立場を「エンゲイジド・ブッディズム」(「社会をつくる仏教」、「行動する仏教」とよぶ。瞑想や修行のために僧院にこもるのではなく、社会に慈悲を貫徹させようとする仏教だ。ちなみに、いわゆる社会福祉は「エンゲイジド・ブッディズム」にはふくまれない。「エンゲイジド・ブッディズム」からいえば、社会がつくりだす諸悪の根を断たずに、その被害者に手を差し伸べるのは、二次的な実践になる。

現実の苦しみを前にして、その原因を糺^{ただ}し、その原因を取り除くために行動する。このような仏教徒の運動は、ベトナムだけにかぎったことではない。スリランカでもインドでも、タイやビルマ、カンボジアでも、第二次世界大戦の終了後から新たな独立国を目指す過程で、仏教は僧院の仏教から社会の正義や道理を求める仏教へ変身してゆく。

はじめににふれたビルマでも、二〇〇七年九月に生じた、僧侶たちによる大規模な民主

化を要求するデモも、このような「エンゲイジド・ブッディズム」の流れのなかにある（ビルマの民主化運動については、守屋友江編・訳『ビルマ仏教徒―民主化蜂起の背景と弾圧の記録』（明石書店）を参照されたい）。

*

詳細は省くが、こうした新しい仏教運動は、近代の国民国家の形成という時代背景から生まれてきているのであり、日本も例外ではない。ただ、日本では天皇制国家に忠誠をつくすのが仏教徒の役割だという誤った見解が支配的となり、かろうじて生まれていた「エンゲイジド・ブッディズム」の芽も摘まれてしまった。その余波は敗戦後も続き、東南アジアを中心とする「エンゲイジド・ブッディズム」の潮流にも無関心であり、それは今も変わらない。

だが皮肉にも、三・一一の悲劇は、日本の仏教徒にも新たな課題を突きつけることになった。とりわけ、原発の事故による放射能汚染の問題は、仏教徒に死者の鎮魂慰霊で事足りているとするような仏教でいいのか、とせまっている。

放射能汚染の恐ろしさについては、すでに専門家によってくり返し強調されているから一言だけふれておくにとどめる。それは「核廃棄物」といい方自体が成り立たない、ということだ。つまり放射性物質は「廃棄」できないのである。放射性物質は、一〇万年単位で放射能が減衰するのを待つしかない。

放射能汚染をめぐる最大の問題は、一九六六年から今日までに日本の原発が生み出した核分裂生成物が、広島に落とされた原爆の百二十万発分に相当する（小出裕章『原発のないう世界へ』）という膨大な量に達している点にある。それらをどうして「保管」するのか。

「保管」するための容器や場所さえない。かりに地下深く「保管」しても、地殻変動などでいつ水脈に漏れ出すともかぎらない。そうなればすべての生命が危機にさらされる。原発は「廃棄」することが不可能な物質を生み出すことによつてしか稼働しないのだ。そのような「原発」が必要なのかどうか、火を見るよりも明らかなのだが、それでも原発を推進する人々がいる。なんと愚かなことか。

私がこの紙面を借りていいことは、今や仏教徒は、放射能汚染という逃げることでできない苦しみのただ中を生きざるをえなくなった以上、原発廃止と膨大な「核廃棄物」の管理に強い関心をもち続けることが最低の行動目標となつたのではないかということだ。

仏教が「慈悲」の宗教であるかぎり、苦しむ人々と手を握り合い、その原因を断ち切るために行動することは当然ではないのか。今までの念仏者はそのような行動にあまりにも臆病であつたように思う。

凡夫の私であつても、阿弥陀仏の名を称することは阿弥陀仏の慈悲が私のなかではたらくことを意味する。となれば、その慈悲に支えられて、社会をおおう苦しみの根を断つために立ち上がることは自然なことではないのか。これから復興される社会が愚かさの象徴である「原発」を残したままであるような復興に終わらせてはならないのだ。

念仏が仏道であるかぎり、阿弥陀仏の慈悲を基準とする生き方を模索してゆかねばならないのではないだろうか（詳しくは、拙著『行動する仏教―法然・親鸞の仏教を受けつぐ―「ちくま学芸文庫」をお読みいただけると幸いです（終）』）

法然上人を歩く

二十五霊場十七番

高橋良和著『法然上人紀行』(探究社)より抜粋

嵯峨

二尊院

嵯峨の釈迦堂清涼寺のあたりから、化野念仏寺までの道は自動車の離合も無理な道である。釈迦堂から奥嵯峨のほうへは観光バスも通らないので道は狭いけれど割合に歩きやすい。

清涼寺の西の門を出ると、小楠公首塚、足利義詮の墓のある宝蔵院があり、それより二尊院の途中には百人一首を選んだ藤原定家の山荘址という厭離庵がある。さらに二尊院の門前をすぎた藪のなかに、芭蕉の十哲の一人である向井去来の開居のあとである落柿舎もある。去来がこの地に隠棲した際に、庭の柿の実が一夜のうちに落ちたことから、この家を買う約束をした人が破約したといういわれのところ、それがために落柿舎と名づけたらしい。

この落柿舎より西の方、小倉山を背にしているのが二尊院である。まるで

小倉山が二尊院を抱きかかえたようにみえるほど山が迫っている。

この寺は小倉山二尊院というので、比叡山延暦寺の三代目座主慈覚大師円仁が嵯峨天皇の勅命によって創建した寺であって、山門からみえる寢殿造りの本堂の屋根がおちついた感じである。

二尊院はなんといっても名利であり、その檀家には二条、鷹司、三条、三条西の各堂上華族や、嵯峨を開発し、大堰川を開いた角倉家などがある。開創後鎌倉時代になってかなり荒廃したことがあったが、そのときには法然の弟子で正信房湛空が復興したので、湛空の墓は二尊院の本堂のそばの石段のぼったところにある。その後応仁の乱のときにもかなり荒廃したらしい。

まず寺伝の二尊院という意味を記しておこう。

二尊というのは浄土教では釈迦如来と、阿弥陀如来の二仏である。元来浄土宗の信仰伝授の形式に、今という視聴覚による方法がある。これを二河白道の表現という。

それは河が両側にあってそのまんなかに一本の細い白い道がある。その二河すなわち火と水の間の白道を歩む行者にお釈迦さまは後から、まっすぐ進めと指示し、阿弥陀さまが前から早くおいでと迎えてくださる、という表現である。これを発遣（はつけん）の釈迦、来迎（らいごう）の弥陀と称している。これが念仏する人の姿で、ひたむきに求道する人々の表現である。ところがこの二尊院の御本尊はお釈迦さまと、阿弥陀さまの御二方を本尊として本堂の正面に立っている珍しいもので、全くその通りの二尊院である。と

ころでこの寺に重文の法然の足曳（あしびき）の御影というのがある。

それは法然に帰依した九条兼実が法然に、あなたのお姿をなんとか絵に残しておきたいと、法然に頼んだ際に、法然は自分のような愚僧の姿を、兼実公のような御立派な方の持仏堂に安置されてはもったいないと固く辞退したのである。

それで九条兼実は、やむなく法然を自宅に迎えたときに、わざわざ浴室に案内をして、風呂からあがったときに衣を着せ、念仏している姿を画くようにということ、法然が風呂から出たところ、絵師詫間法眼がひそかに簾中よりのぞきみて画いたというのである。ところがどうしたことが、法然の足が衣の外にあらわれていたのでそれをそのまま画いたのである。

それから何日かすぎたときである。法然が兼実の邸宅に赴いたとき、

上人さま、あなたのお姿を画かせましたので、開眼供養していただきたい。と兼実が例の足のすこし出ている法然の御影を出してみせたところ、法然は、これはまことに無作法な姿である。

といって、その絵の前で念仏するとその足がひっ込んで、正しく坐っている姿になったという伝説がこの足曳の御影である。

おもしろい伝説である。

連載

会いたい人 関 容子



撮影／タカオカ邦彦

早稲田大学で白井さんは教育学部を選んだ。

演劇の道へ万一进めない場合のために、教員免許を取得しておこうと考えたからだった。「でも結局演劇科の教授に卒論を出しました。研究テーマはベケットの『ゴド待ち』（『ゴド』を待ちながら）です。秀をもらって、論文は大学に残ってるはずですよ。一、二年生のころは演劇書ばかり読んでました。先輩からピーター・ブルックやグロトフスキの本を読めとか、筋トレをしろとか厳しく言われて、たまに大学の授業に出ると言うとき、フザケンナって（笑）」

二年生のとき、白井さんが演劇を志した原点の地である京大西部講堂に晴れて出演する。「端役でしたけど、もう嬉しくてね。立命館時代の友だちも見物に来てくれた。演し物は先輩が書いた『裏表畳返しの宴』という構成劇。ぼくの役は畳の下から甦ってくる亡霊で（笑）、着物の女の子をおぶって出たことは憶

えています。つまり現代版ゴドーみたいなもので、芝居は筋じゃないんだ、見せるものは役者の肉体だ！ っていう、そんな芝居が優勢を極めてました。どうやってお客をびつくりさせるか。ビジュアル的にも音楽的にもびつくりさせながらいかに空間を磨きこんでいくかを、当時学生なりに真剣に取り組んでいたんですね」

三年生のとき、白井さんの演劇人生の前半生に深い関わりを持つことになる高泉淳子が二年生で入部してくる。

「彼女は黒テントの仙台公演、佐藤信さん演出の昭和三部作を観て感動したらしいんです。斎藤晴彦さんがチゴイネルワイゼンに全部日本語の歌詞をつけて延々と歌うのを聞いて、すごくびつくりしたんでしょうね。やつぱり芝居がやりたくて早稲田に入ってきた人だから、話が合うんです。早稲田の劇研というのは、それ自体が一つの劇団なのではなくて、学生たちがこの指止まれ方式でいくつかのア



早稲田大学、演劇研究会時代の白井さん

ンサンブルを組んで芝居を作っていくんですよね。先輩たちはあこがれの鈴木忠志さんの『早稲小』（早稲田小劇場）をもじって『早稲田新劇場』。一年後輩の鴻上尚史君は『第三舞台』を作ったんで、ぼくたちは新機軸を打ち出すつもりで『新機劇』。高泉君もこのグループに入ってくれました」

しかしこのときの仲間たちの書く芝居に満足できずに、白井さんは再び先輩たちのグループに戻った。

「そしたら一回抜けてるんでいい扱いをしてもらえなかった。本番が始まってから、突然ぼくの出番がカットされて、スタッフワークだけになったんです。シヨックで、もうやめよう、あんなに好きだった演劇から足を洗おう、と思って、一方的に演出家に手紙送って退団届けを出したんです」

少年時代のピアノのコンクールにしても、このときにしても、白井さんは思い切りが速い。それがまた次のよいほうに向かうのだから、

ら、よほど運が強いのだろう。

「ちょうど演劇で身を立てるのは大変なことだ、とわかり始めたところだったんですね。四年生の秋口で、就職活動のラストチャンスでした。出版社、テレビ局、広告代理店とマスコミを受け始めて、面接では演劇のことを一生懸命しゃべって、結局電通パブリック・リレーションズに入社しました。ヤマハ発動機、全日空ホテル、東武百貨店とかの担当をして、入社した年にはデイズニー・ランドのオーブンに関わって、これが楽しかったですね」

当時の電通PRで白井さんの上司だった田澤慶暁さんは、私の長年の友人だが、何やら長身白哲のハンサムな演劇青年が入社してきたけれども、企業におさまり切れる人物じゃないな、と感じたそうだ。

「ああ、田澤部長。怖い先輩でした。ダメなんだよ、そんなことじゃ世間は通らないよ、ってよく怒られて、母に言われてた社会とは

このことかと思ったり（笑）。でも最近、たまにどこかでバツタリ出会うと、やあ、頑張ってるね、テレビで見たよ、とか言ってくださるんです」

そのうち高泉淳子も、白井さんの口ききで電通PR事務員のアルバイトとして入ってきた。

「顔を合わせれば、やっぱり白井さん、演劇やろうよ、という雰囲気になっていく。その結果、遊●機械／全自動シアターを昔の仲間たちと立ち上げることになるんです。会社が退けるアフター5から稽古に入って、公演は金、土、日の三日間だけ。最初の公演は僕と高泉だけの二人舞台でした。しかし同世代の小劇場文化としてはまとめられなくなかったんで、下北沢の本多劇場とかスズナリとかは敢えて避けて無理しても青山円形劇場でずつとやってました」

そのころの芝居は、全自動と銘打っただけあって、即興演技を組立ててゆく言わば集団創

作のハシリみたいなものだったらしい。

「役者がそれぞれアイディアを出して、自分がどんなキャラクターを演じれば面白いかという即興のエチュードを組み立ててゆく。演出を担当した者も当時働いてたから、そこにいないことが多かったんで、役者リーダーの僕がだんだんみんなを見るようになって、それが演出家としての僕のスタートラインです。公演のたびに若い子たちもチョボチョボ入ってきて、その連中にも即興をやらせてみる。誰と誰を組み合わせたらどう面白くなるかを考えるのが、僕はちよつとだけ長けていたのかもしれない」

現在の高泉淳子からは想像しにくいですが、彼女はそういう即興演技が不得手だったそうだ。「あるとき窮地に追いこまれて、紙袋を頭にスッポリかぶった彼女が、少年の声でしゃべり始めたんです。ああ見えてものすごくシャイな人なんで、自分で作った言葉を人前でしゃべるのが恥ずかしかったんでしょうね。紙

袋が仮面の役をして、視線を気にせずにはやべれるようになった。あのね、僕ね、いつも学校から帰るとこんなことするんだけどね、ってちよつと鼻にかかった少年の声で、セキを切ったみたいにしゃべり始めた。僕も学生のころおぼえがあるけど、アルバイトのぬいぐるみショーでルパン三世とかウルトラマンとか別人になると何でもできちゃったんで、彼女もその感じだったんでしょね」

のちの高泉淳子の名シリーズ『僕の時間の深呼吸』の主人公、丸目鏡に半ズボン姿の山田のぼる君誕生の瞬間だった。

「最初のころ、紙袋をはずすと途端にしゃべれなくなるんで、考えたのがあの黒ブチの丸目鏡。するとお面をかぶったみたいになるんですね。ちよつとバブルのころだったんで、世の中はどんどん豊かになってゆくのに自分たちは取り残されて、本当の自分はどこにある、みたいなことを少年の形でしゃべり始めて、ちよつと『不思議の国のアリス』のイメ

ージもあつたんで、僕が時計屋になって少年と時間のことをしゃべったりね。そのうちほかのメンバーもいろんなキャラクターで登場させて、遊●機械の初期の七年間くらいは高泉の作つた山田君を中心にして物語を展開させてゆくという、集団創作の形が固まっていたんです。あのころ会社でも芝居でも家でも……当時彼女と暮らしてたんで年中一緒に、四六時中演劇のことばかり語り合つてはトライしていくという……彼女との最も濃い時間だったかな、と思いますね」

白井さんは会社からメルボルン出張を命じられて五年間の会社勤めを辞め、三十歳にして自分のめざす道がいよいよ明確になった。「劇団も軌道に乗って、観客動員数が一万になりましたからね。そのころ三谷幸喜さんが僕たちの『山田君』の舞台を観て、テレビのナマ番組に呼んでくれて、オリジナルの台本を書

電通PRセンター（現電通パブリックリレーションズ）に勤務していたサラリーマンの白井さん



いて出演させてくれたことがあるんです。それで僕が三十六歳のとき劇団が十周年を迎えて、たまたま身体が三か月間あいてた。そして、ドラマに出ませんか？ って三谷さんから電話があつたんです。『僕の時間の深呼吸』の舞台で観たけど、デタラメなフランス語でメニューを読むの得意でしょ？ って（笑）。それが『王様のレストラン』のソムリエ役でした。松本幸四郎さん筒井道隆さん鈴木京香さんとかの中にボンと知らない顔の僕が一人入って、ものすごく緊張して、初回を見たらなんて舞台っぽい演技をしてるんだ、とあきれましたけど、でもつくづくメディアの力の大きさを思い知らされましたね。三谷さんが、これ放映されたらドラマのオファーがいっぱい来ますよ、って僕に言っただけど、翌日自由ヶ丘から電車に乗ったら女の子たちが、あ、あ、ソムリエだ、って指さすし（笑）、確かにオファーもありましたけど、ここでテレビ俳優の道に行ったらちよつと違う人生に

なるな、そのときのジレンマは大きいだろうなと思って、僕は劇団にこだわりました」

しかしそのころ、高泉淳子とのパートナー・シップにだんだんとズレが生じてくるらしい。

「彼女のやりたいことを僕が受け皿のようにバックアップしているだけの気がしてきて、フラストレーションがゆつくりとたまっていたんですね。『ア・ラ・カルト』では長いテールをはさんで仲のいい恋人同士がしまいに喧嘩になる、という場面がよくあったんですが、それは実際に二人の間であつたことで、これを芝居にしたら面白いんじゃないか、って話し合ったりして、おかしなものです。彼女に本格的に戯曲を書くことをすすめたのも僕だし、書いた物を評価し舞台に乗せたのも僕ですけど、僕が彼女の中の一歩いい作品だと思ふ『こわれた玩具』を巡っての論争がやがて僕たちを大きく引き離れさせることになるんです」

芸術家同士というのはつらいものだ。私は

その戯曲のことは高泉淳子の著書『仕事録』で多少知っている。幕切れで主人公の少女が飛び降り自殺をするが、「家族に殺されて死んでしまいました。オシマイ」というのが作者の考え方だった。

白井さんが率直に淡々と語る。

「つまり、少女の苦痛を止めるために両親が濡れたハンカチを少女の顔に乗せる、という幕切れを僕は非常にいいと思った。残された人間はこれから強く生きて行かなきゃいけないんだから。でも彼女は、ハンカチの下で少女が微笑む……これをどう表現するか、って言う。稽古場でみんなの前で議論になっちゃって。これは、その後の『アナザーデイ』という作品で加速し、僕はここらでもう自分一人で物を作りたい、と強く思つて、遊●機械を卒業させてもらいたいと思うようになりました。だから、学生時代から最も刺激を受けて、一番影響を受けた高泉淳子を、僕は自分から切り離れた形になるんです」（つづく）

第四十二回

江戸を歩く



墨田堤を行く

森清鑑

大江戸ウォーカー

長命寺の桜餅

海舟はこれまた島田虎之助のさしずで向かいの弘福寺（黄檗宗）でも厳しい禅の修行に励んだ。当時は想像もつかない大伽藍。かの有名な五百羅漢を彫った松雲の師匠鉄眼の兄弟子、鉄牛禅師の創建。厳しい禅修行が行われた処でもある。明治になって森林太郎は医師の父親と連れだって、岩見国津和野から弘福寺近くの小梅村に移住する。津和野藩主亀井家の江戸における菩提寺でもあった関係で弘福寺は森家の菩提寺となった。そういうわけで関東大震災まで鵠外の墓はここにあったのである。

牛御前社と弘福寺の北に隣接して長命寺はある。天台宗延暦寺の末寺。名の由来は三代將軍家光が鷹狩りの際、腹痛に見舞われ、この寺の井戸水で薬を飲んだところたちどころに快癒。寺号を賜ったとある。境内にはこの長命水碑や芭蕉の句碑がある。「いざさらば

雪見にころぶところまで」。長命寺は雪見の名所でもあった。

道は長命寺を回り込んで北に進む。道に沿って割水が流れ風光明媚なことこの上ない。特に春ともなれば桜の名所。桜並木は、三囲稲荷から北の木母寺に至るまでの道沿いを彩る。いわゆる向島の花見を現出。八代將軍吉宗が品川御殿山、王子の飛鳥山とともに、この向島を桜の名所とした。向島とは浅草か



◆散歩図

ら見て、隅田川の対岸、向こうの島を意味し、江戸っ子が好んで使った言葉である。

道が北に転じた右側に有名な長命寺「さくら餅」山本屋がある。享保二年（一七一七）、長命寺北門の門番に住み込んだ元祖山本新六が長命寺の門前で内職に線香などを売っていたのを土手の新鮮な桜の葉を集め、塩漬けにして餅を包み、「さくら餅」として売り出す。これが花見客の評判を取り、たちまち江戸の名物となった。文人墨客も愛食し、明治になって正岡子規もこの店をこよなく愛した。桜並木沿いに北にちよつと歩くと左に「言問団子」がある。こちらの店は、植木師、外山佐吉が明治の初めに創業したもので、そのほどよい甘さと櫛にささずに皿に盛る。これが評判をとる。「言問」の名は在原業平の「名にしはいざ言問はん都鳥 わが思う人はあり やしやと」（古今和歌集）からとったもの。この歌の舞台は隅田川沿いとされ、言問団子が有名になるとこの辺り一帯の別称となっ

た。幸田露伴、野口雨情、竹久夢二も常連。辺りの景色はすっかり変わったが両店とも今も伝統を守っている。

これだけ揃えば花見はもう満開である。落語「花見酒」。向島の桜が満開という評判。幼なじみの二人、「ひとつ繰りだそうではないか」。しかし、手持ちの金がない。そこで兄貴分がアイデアを出す。酒屋に掛け合い、灘の生三升を借り、一杯十銭で売ろう。儲けた金であらためて一杯やろうではないか。向島に來ると花見客で大賑わい。さあ、商売。ところが良い酒の香りが風にのって鼻をつく。我慢できなくなった弟分がたまらず、「兄貴十銭出すから売ってくれ」。すると今度は兄貴分が「おれもたまらねえ。はい十銭」。とうとう全部呑みきってしまう。客が来たときには、酒はすっからかん。二人はぐでんぐでん。「おい、儲けは」。「十銭しかねえ」。「馬鹿野郎、考えてみれば当たり前だ。十銭が行ったり来たりしてただけじゃねえか」。

「あ、そうか。そりゃムダがねえや」。笠信太郎の「花見酒の経済」はこの斬を持ち出し、手厚い保護下で資本が同じところをぐるぐるまわるだけの当時の日本経済のもろさを指摘したものである。

言問団子を過ぎて須崎村の桜並木を北に進むと寺島村。浅草の橋場から白髭の渡しに着く。小さな湾のように入り組んだ水辺には將軍のお上がり場がある。ここを過ぎると白髭社地（白髭神社）である。雪旦の絵を見ると実に素朴な宮の前に老夫婦が合掌している。

川と緑の自然の只中にある。白髭社の南に沿って東に歩けば直ぐに向島花屋敷。十一代家斉の頃、町人、佐原菊塙が三千坪の土地を買い取り、自由な風流雅趣に溢れた庭園を造った。木々は梅三百五十本の他、詩歌にゆかりの草木で満載。文字通りの百花園である。そこで客寄せに企画したのが七福神巡りである。そこには三閼神社、弘福寺、長命寺、白髭神社も含まれている。百花園はその参謀本

部と化す。將軍家斉がここに立ち寄る。十二代家慶も御成。いちやく有名になる。さながら文人墨客の遊び場の観を呈した。

墨田堤に戻り、街道の桜並木を味わいながらさらに北に歩く。周囲の光景は広い田畑の中に幾つもの大きな池があり、隅田川からの引き水もある。この水辺の自然風景は多くの画家が描いている。道は墨田村を縫って進む。すると隅田川からの広い内川（入り江）が東に広がり、そこに浮かぶ島のような土地が東

◆広重「木母寺内川」



◆江戸名所図会 雪旦 手前、牛御前の森、奥に弘福寺、北に長命寺

西にある。これが木母寺境内である。

瀟洒な門を潜ると名物の桜の木と美しい松の木が点在している。小高い丘に囲まれた広場の中央に木母寺本堂があり、西側に梅若塚。塚の後ろ、隅田川の入り江に茶屋が並ぶ。境内には多くの参詣人が見える。ここは江戸でも有数の風光明媚なところ。浅草寺を参拝したあと、舟で隅田川を廻り、梅若塚を訪ねる。この遊覧コースは江戸で評判であった。広重の絵は、蜷料理で有名な「植半」から内川に架かる橋の方向を描いたものである。

ここで有名な故事が梅若伝説である。京の公卿、吉田少将の子、梅若丸は七歳の時、比叡山に登り、修学。十三の時、奥州の人買いに拐かされ、当地に至ったが病没。時に貞元元年（九七六）三月十五日。辞世の和歌「尋ね来て問はば応えよ都鳥 隅田川原の露と消えぬと」。亡骸は塚に葬られ、柳を植え目印とする。翌年、村人が供養していると梅若の母御前が探しに探して、ついにこの地に辿り

◆広重 綾瀬川、鐘淵



着く。その後、母は尼僧になり、しばらく菩提を弔っていたがやがて隅田川に身を投じる。有名な謡曲「隅田川」はこの悲劇の物語を切々と訴える。木母寺は、梅若の死とともに建立され、時代を経て家康が山号を与え、近衛関白信基が梅の字を分けて木母寺とした。梅若の命日三月十五日には供養の大念仏が唱えられ、大勢の江戸っ子が舟や徒歩で参集したのである。

木母寺の西、隅田川に面したところに松林

◆江戸名所図会 雪旦「鐘淵、丹頂の池、綾瀬川」。



に囲まれ、水神社がぼつんと建っている。隅田川の総鎮守。水難、火難除けの神で船頭を初め、庶民の厚い信仰を得る。木母寺に沿ってさらに北に歩むと隅田川は大きく西に折れ、荒川となり、東に流れる綾瀬川と分岐する。ここが鐘淵で、当地にあった普門院が江戸に移転する際、鐘を川に落とし、鐘淵と呼ばれるようになった。隅田川に流入するいくつもの川筋が綾取るように見えたので人々は綾瀬川と呼んだ。鐘淵の合飲木は特に有名で広重は茫洋と広がる綾瀬川と合飲木を描いている。材木を筏に組み運ぶ人の姿。正に池波正太郎「剣客商売」の秋山小兵衛の住処を彷彿させる風景である。

雪旦は隅田川から綾瀬川を望む美しいパノラマを描いている。盛り上げた土手の上を平らに削った道が川沿いを蛇行する姿は見応えがある。絵の右上に描かれている大きな池が「丹頂の池」で実は南北に大きく広がり、池の南東沿いに毘沙門天で有名な多聞寺があ

る。この池は江戸でも有数な観光地で江戸っ子は丹頂池の他に、大池、白鳥池、荒神池、多聞寺池などと呼んだ。丹頂のみならず、白鳥が多く棲み、池の中央に白鳥島があり、女竹が群生している。多聞寺東沿いの田畑一本道を北東に歩くと、綾瀬川から南北に下る、古綾瀬川（荒川）に架かる堀切橋にぶつかる。この橋を渡ると堀切村で、辺り一帯に花菖蒲が乱立し、これも江戸っ子にとっては絶好の散策地であった。

【参考文献】

- 江戸名所図会下巻（角川書店）
 広重の大江戸名所百景散歩（人文社）
 東京路上細見 小樽山俊著（平凡社）
 江戸史跡事典下巻（新人物往来社）
 水川清話 勝海舟自伝 勝部貞良編（広池学園事業部）
 江戸明治東京重ね地図 中川恵司編（エービーピーカンパニー）他

おわりの時に、善知識のすすめによりて、南無阿弥陀仏と、十声とこえとなうるに、一声ごとに、おのおの八十億劫はちじゅうおっごうのあいだ生死しじょうじにめぐべき罪を滅して往生すと説かれて候めれ。そうつ

(法然上人『正如房へつかはす御文』)

いよいよ臨終という時になって、善知識の勧めのままに「南無阿弥陀仏」と十遍のお念仏を称えれば、その一声一声ごとに、これまで積み重ねてきた罪業の報いとして、これから先八十億劫という永い歳月にわたって生き死にを繰り返さなければならかったところを、その罪の報いが除き消されて、お浄土に往生することができる『観無量寿経』に説かれています。

「めぐるべき罪を滅して」——タイムマシンに物申す？——

「ニュートリノが光速を超えた！ タイムマシンが可能に？」

去る九月二十四日、新聞各紙の一面がこんな見出しで賑わいました。その前日、名古屋大学准教授・小松雅宏先生を中心とする国際共同実験チーム・オペラがニュートリノが光よりも速いという実験結果を発表したからです。共同チームは、スイスにある欧州合同原子核研究所の加速器から七三〇キロ離れたイタリアのグランサッソ地下研究所の検出器に向けてニュートリノを発射し、発射時と到着時を測定。三年間の実験で蓄積した約一万六千回のデータからその速度を計算した結果、秒速約三〇万キロの光が約二・三ミリ秒かかるところを、ニュートリノは一億分の六秒早く到着するという結論を導き出し、ニュートリノの速度が光より一〇万分の二速いことを突き止めたのです。

しかし、光よりも速い物体が存在することになれば、かつてアインシュタイン博士が相対性理論で実現不可能としたタイムマシンが実現可能になるかもしれません。アインシュタインの相対性理論によれば、質量のある物体の速度が光の速度に近づくと、その物体の時間の進み方は遅くなり、光速に達する時時間は止まってしまいます。ですから、光速よりも速いニュートリノは時間を遡っているかもしれないのです。共同チームの研究者も今回の結果には驚きを隠

せず、発表に至るまで六ヶ月をかけて再検証・再テストを繰り返したそうです。発表当日になっても決して慎重な姿勢を崩さず、ウェブサイト上に全データを公開し、世界中の物理学者に精査してもらったことにしました。

硬派の科学ニュースとしては珍しく、他の話題を抑えて注目度ナンバー1だったそうで、かくいう私も分からないままにネットサーフィンを繰り返しました。昭和六十二年、東京大学教授・小柴昌俊先生がニュートリノ検出に成功してから二十四年、平成十四年、その小柴先生がノーベル物理学賞を受賞されてからわずか九年足らずの発表です。かつて私も、鋼鉄やダイヤモンドでさえイスイ通り抜けてしまうニュートリノと阿弥陀さまが放たれる光明の功德とを重ね合わせて「無礙光——今もすべてのものを貫いて——」と題して本誌に拙稿を掲載した経験がありますが、日進月歩の研究の深化に改めて敬服させられます。

ニュートリノが時間を遡れるのか、いやすでにもう時間と空間を縦横無尽に行き来しているのかは今後の研究成果を待ちたいところですが、タイムマシンの実現となるとこれは仏教の立場からも物申す必要があります。そもそもお釈迦さまがお示しになった縁起とは、この世のすべてのものは互いに影響し合いながら、時々刻々、移り変わり続けているという教えです。なるほど、仮

に誰かが一日でも一時間でも一分でも時間を遡って、どんなに些細なことであったとしても何かを行えば、そこから派生する影響はそれこそ天文学的な広まりを現出することとなるのです。裏を返せば、特定の時間を遡り、自分に都合のいいようにだけ物事を取り繕うことなど到底不可能だという道理を縁起は教えています。もちろん法然上人も、そうした事情は十二分にご存じでした。

だからこそ法然上人は、『観無量寿経』に説かれる「八十億劫の生死の罪を除く」という一節を、冒頭のご法語のように「八十億劫のあいだ生死にめぐるべき罪を滅す」と、阿弥陀さまが過去世に遡って、輪廻転生を繰り返してきた願往生人がこれまで積み重ねてきた悪しき行為の一々を帳消しにして下さるということではなく、願往生人がこれから先八十億劫という永い歳月にわたって輪廻を経巡るべきであった罪業の報いを阿弥陀さまは働かなくして下さるとお示しになったのです。法然上人は、阿弥陀さまが過去世に遡って何らかの働きを施してしまうことは、その先に無限に広がる縁起の積み重ねを根底から覆すこととなってしまう、それは取りも直さず縁起の道理に逆行することに他ならないと経説の深意を読み取られたのです。そうした意味で法然上人によるこのご法語は、まさに仏の智見に等しい尊いご教誡でもあるのです。合掌（林田康順）

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第二十七回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

ドイツ帝国軍部を蝕む
腐敗と墮落



温厚篤実の 軍人の鑑、豹変す

規律第一でドイツ人の中でもっともドイツ人らしい。ドイツの軍人たちをそう思っていた渡辺海旭だったが、若き士官たちの夜会に誘われたことで、意外にも彼らは風流にも通じ、なかなかさばけた連中だと好感を抱いた。そのいっぽうで、乱入した海軍士官とのやりとりから、将来ドイツ軍を担う若手の中に、弱肉強食のサーベル主義の台頭を嗅ぎ取って危惧も抱いたのだった。

しかし、その危うさへの直感^{ひんかん}は的を射ていたのだが、この問題がかかえる全般的な状況理解はまだまだ浅かった。たんにイギリスとの軍拡競争に乗り遅れまいと悲憤慷慨^{ひふんこうがい}する一部の怒れる青年将校の発露だと受け止めていて、サーベル主義の台頭の背景に何があるのかにまでは深く考えが及んでいなかった。それに気づくきっかけをつくってくれたのも、

隣家の陸軍中尉だった。

中尉に誘われてでかけた夜会から旬日したある日のことだ。いつもの夜の日課で梵語の經典と格闘していると、野外で大声がする。窓からのぞくと、あの紳士然たる中尉が、従卒をこっぴどくしかりつけているではないか。と、激昂きわまったのか、中尉は従者に手を振り上げた。平手打ちの音が聞こえた気がして、海旭は思わず息を呑んだ。従卒が何かい返し、それが中尉の激昂をいやましたらしく、中尉は気色ばんで腰のサーベルに手をかけた。海旭が階下にかけてつてとめに入ろうと腰を浮かせたところへ、軍刀の柄から中尉の手がはなれ、ほどなく二人の姿は闇の中に消えていった。

つい先だっても、連れだつて出かける中尉夫妻を見送ろうとして、おそらく貧血だったのだろう、夫人の世話をする下働きの娘が倒れたのを、おろおろするだけの夫人を制して、中尉が抱き起こして介抱するのを海旭は見

て、感心したばかりだった。みるからに温厚篤実で、しかも洒落者でもある中尉が従卒に對してこんな振る舞いをするとは、所詮軍人とは一皮むけば粗暴な輩で、野暮天サーベル海軍士官と五十歩百歩なのかと、海旭は自らの人を見る目のなさを恥じた。しかし、一夜あけて、その理解が一面的だったことを思い知らされた。

上層部の腐敗に募る 青年将校たちの怒り

大学への出がけに、たまたまアパートの前で従者と出会ったので、あいさつがたがたさりげなく昨夜の一件にさぐりをいれてみた。

「昨晩は、中尉殿に厳しく説諭をされていたようだが、口だけならともかく、鉄拳の上にサーベルに手がかかるというのは、いささか尋常ではない。なにがあつたのですか」

そう問いかけた海旭に、従卒は一瞬言いよ

どんでからはそりと答えた。「知り合いの上官の悪口を言ったことが、主人の逆鱗にふれたのです」

従卒の説明によると、前日は非番だったので、日頃から入魂にしている中尉の上官である某大尉の従卒を誘って居酒屋へ繰り出した。大いに盛り上がって、盃をかさねるうちに深更に及んだ。中尉の従卒が「明日が早いからもう帰らねば」というのに、同僚の従卒はこういつて慰留した。

「おぬしも日頃から言っているではないか、お前の主人は、陰で賄賂をもらっている腐れ将校だ。そのくせ威張りくさつてとんでもない。軍人の風上にもおけぬ。あんなやつに忠義立てをすることはないと。だったら、もう少しあつて、俺の愚痴も聞いてくれ」。

従卒は、この慰留に「そうか、そうか、たまには遅れて、ご主人殿をあわてふためかせてやったらいい」と乗つたのが、間違いのものだった。そそのかした当の本人が、深酒が

すぎて、自分の主人の出迎えに遅れてしまい、理由をただされて、「軍人はいついかなるときであれ嘘を言ってならぬ」の日頃の教えを馬鹿正直に実践したところ、中尉から「いやしくも噂だけで帝国の守護たる軍人を愚弄するとは何事か」と指弾されて、ついに鉄拳が飛んだという次第であった。

「その某大尉の行状というのは本当なのかね」と海旭が尋ねると、従卒は青あざが残る右目をぎろりと剥いてこう答えた。

「金だけではないですよ、悪場所の女にうつつをぬかしたり、上にいけばいくほど、そんなのがごろごろしてますから。むしろうちの中尉殿は例外です。中尉殿はそれを知って、私を殴るというより、わがドイツ軍の腐敗がやるせなくて、それを爆発させただけなのかもしれません」

従卒は一息入れると、ふっとため息をついて、うなだれながら続けた。

「実際に最前線で戦うのはわれわれ下士官で

す。将校連中に下士官たちが不信感を抱いているということは、軍の士気にかかわります。これで、いまや主要敵となったイギリスと、そして仇敵のフランスといざ一戦まじえることになったら、戦えるのか。ほんとうに心配です」

所詮軍隊だから、「体罰的懲」も仕方がないかと思っていた海旭ではあったが、従卒が思わず吐露したように、軍上層部に癒しがたい腐敗があるとすると、これは由々しき問題である。上が腐れば下の士気は当然低下する。将来軍の中核を担う若き士官の一部には、これに反撥して血気にはやる者もでてくる。ひょっとして海軍士官のサーベル主義には、そんな背景があるのかもしれない。海旭はそう思うに至ったのだった。

不倫殺人に高級娼婦斡旋事件

実は、ドイツ軍部の腐敗は、海旭の想像以上に深刻であった。

それを教えてくれたのは、海旭も出入りしている自由思想団のリベラルで嗜好きの女性たちであった。家族ぐるみのつきあいをするようになった歯科医宅の夕食に招かれたときのことだ。海旭が先日体験した隣の中尉の従卒殴打事件を持ち出したところ、歯科医夫人が身を乗り出してきた。

「ワタナベは知らなかったの。軍の乱れぶりときたら、それはひどいものよ。その証拠がこの間、アーレルスタインで起きた事件よ」といってその概要を面白おかしく解説してくれた。

歯科医師夫人によれば、それはこんな顛末だった。

クリスマス之夜、さる大尉が上官の某少佐宅に招かれ、少佐夫妻と大いに飲みかつ食らった。宴は日をまたいだため大尉は勧められるままに少佐宅に宿泊。しかし、深更に惨事が起きる。寝室で寝入っていた少佐を大尉が射殺したのである。実はこの大尉と少佐の妻

はかねてから不倫の間にあったことから、この凶行に及んだものと思われた。それを知って招いたほうも招いたほうだと眉をひそめるものもいれば、いやいやすべてを清算するつもりで妻が台本を描いた茶番劇かもしれぬと妄想をたくましくするものもいて、さまざま揣摩憶測がとんだが、あつけない幕切れとなった。審理中に大尉が、つながれた獄の中で自殺、すべてが闇のなかへ葬られてしまったのである。

話を聴き終えて、海旭は、内心で近松の世話物には遠くおよばぬ安手の西欧歌舞伎的一幕物だと思ったが、まさかそんな本音を言うのも憚られ、また歌舞伎の世話物のなんたるかをドイツ女性に説明するなど到底できる自信もなかったもので、無難な評価を返してお茶を濁そうとした。

「いやいやひどい話です。いつの時代も、また洋の東西をとわず、男と女の醜聞のたねはつきないもののような」

すると、齒科医師夫人はインテリ左翼だけあって、海旭のおごなりの返答の真意をかき分けて、不満げに口をとがらせてこう言い返した。

「あらあら、殿がたにつきものの醜聞一般に解消されては困りますわ。私は、これをいまわがドイツの軍上層部に蔓延している腐敗の証しとしてお話しているのですよ。だったらW亭事件はどうなのかしら」

これに夕餐に同席していた夫人のお仲間の女性が畳み掛けた。「あのなかには軍人のお偉いさんがいるって話よ」

W亭とはストラスブルクでもっとも格式の高いフランス料理店で知られていた。一皿十マルクは下らず、ワインも一瓶数十フラン、貧乏留学生の海旭にはいったいどんな料理がでるのだろうかどと想像する気すら起きない「別乾坤けんけんの店」である。

勉学三昧の坊主ゆえに初耳だったが、この街の女性たちにはいまもっとも旬の話題であ

るらしく、齒科医師夫人のお仲間によれば、なんとこの給仕長が高給娼婦の斡旋をしており、その「常連顧客」のなかには市の高官、そして軍の高級将校がいたのである。

今度の事例は、海旭たちが住んでいる町での話だけに、現実味と説得力があった。

上流階級の腐敗たるや目を蓋おさいたくなるが、その中に襟をただすべき軍人たちがいるとは、この国は危うい。海旭は驚きと危惧を禁じえなかった。

それでも海旭の胸中には、わだかまるものがあつた。これは、そもそも軍人嫌いの一部のリベラルなインテリ左翼女性たちの、ある偏りをもった「一部世論」なのではないか。普通の庶民たちはどうなのだろうか。やがて、普通のドイツ国民の軍人観をはつきりと知ることができる大スキャンダルが起き、海旭のドイツ軍部に対する懷疑はいっそう深まることになるのである。

(この項つづく)

「法然上人をめぐる人々」

師を慕う 親鸞

石丸晶子

挿画・佐野芳朗



連載

第六回

後鳥羽上皇は――

十六

後鳥羽上皇は正月二十三日から二月十二日まで大阪府島本町の水無瀬離宮に遊びにいて、蹴鞠や笠懸、狩りなどをして楽しんでいった。

が、上皇の下で再度専修念仏を弾圧すべしという基本方針が定まったのは、そのさ中である。

『明月記』によると、これらの日々、上皇周辺はただ専修念仏弾圧の話ばかりで、二月九日には専修念仏僧の逮捕・拷問が行われたという。

これらのことを憂慮した兼実が、法然上人の弟子（筆者注・信空か）を随伴した藤原兼時を使者にたて、水無瀬離宮に遣わしたのは、二月十日。寛大な処置を願ひ出るためであった。

もともと、兼実家の家司であった藤原定家

が、上皇は頑固一徹な気性なので兼実がいくら嘆願してもどうしようもないのではないかと、『明月記』に書いている通り、この日の嘆願がどこまで功を奏したか否か不明で、二月十四日、その二日前に京都に戻っていた上皇は、側近の藤原光親を使者にして朝廷（＝土御門天皇）に専修念仏停止の議定をするように指示している。

史料を追っていくと、「これらの日々、ただ専修念仏の話ばかりで」という『明月記』の記述が如実にうかんでくるが、法然上人とその門弟の処断が決まったのは二月十八日であった。死罪、遠流、また女性たちもその罪によってそれぞれ処罰され、「これらは聖道門仏教各派が専修の流行をことのほか憂鬱なことだとお上に訴えてたからであった」（『皇帝紀抄』）。

親鸞に対しては最初、死罪にすべしという議論が盛りあがっていたといわれる。しかし恩赦を嘆願する者がいて遠流に変更された

いう。

一連の審議の過程で、法然上人の高弟善信房親鸞が僧籍に身を置いたまま公然と結婚していることを知った後鳥羽は、顔色を変えて側近に問うたのであった。

「これはどういうことだ」

「親鸞のことでございます」

側近たちは薄ら笑いをうかべて答えた。

「我等も最近になって、法然房の身辺を調べてやっと判明したのでございますが、公に妻を迎えているようにございます」

「僧籍は離脱したのだな。その届け出は受けていないが」

「いえいえ」

太鼓もちの顔になった側近は、嫌々^{いやいや}をして

手を左右に振りながら答えた。

「離脱も何も初めからあったものではございませぬ。厚顔な奴でございまして、仏前で公然と婚礼の式を挙げ、妻を迎えても僧であることに変わりはないと大法螺を吹いている由

にございます」

「ふむ。しぶとい男よの」

後鳥羽の顔色が変わった。怒った時の上皇の常として額に静脈が浮きでている。

十七

「僧侶の果報と妻帯の果報と両手に花を持ちたいというのでございますから、まことにしたたかな男にございます」

「食えませんな」もうひとりの太鼓もちの貴族がいった。

「それにしても弟子が妻帯しておること、師匠の法然房は存じておるのか」

上皇が訊ねた。

「もとより存じております。法然房の教えとやらは出家在家の別なく、念仏によって弥陀は平等に救済される、というものの由で、親鸞は師匠のそこところに突け込んだのでございます」

「いかにもしたたかよの」

「日ごろの教えなれば、法然房とても親鸞に泣きつかれて妻帯を許さぬわけにはいかなかったのでございましょう」

「で、相手の妻というのは何処の娘か」

「それが……」

側近は互いに顔を見合わせた。

「答えよ。親鸞の妻となったのはどこの娘なのか」

側近達を見回し、嫌悪の情を露わにして後鳥羽は言った。

「どこの町家の娘かと問うておる」

「……月の輪殿の娘とか」

「何と！」

一瞬絶句してそう叫ぶと後鳥羽は、

「そち達もよう知っておるように、出家者は公然とは妻帯できぬ決まりである。出家した親王として建前は孤独の身なのだ。それを堂々と仏の前で婚姻の儀礼を執り行うたとは、神仏はもとより、この朝廷をも恐れぬ所業では

ないか」

「まことにお上を恐れぬ痴れ者どもにございます。月の輪殿は専修の輩に騙だまされているに違いございませぬ」

「……ふむ」

後鳥羽は唸うなった。その場にいる七、八人の太鼓もちたちは、袖を口元にあてて互いに囁きあったり、薄ら笑いを浮かべて手を左右に振り、親鸞の諸行に対して嫌々をしてみせている。

「それにしても、いったいどうして親鸞は兼実の娘を娶めとることになったのか」

後鳥羽は訊ねた。

「それが……」

一人が口ごもると、他の一人が引き取った。「月の輪殿の娘と申しまして正室の娘ではなく、外に出来た七番目の娘とも養女ともいう娘でございまして」

「ほう」

「二年ほど前に娘の母親は亡くなったので



ございますが、親鸞はその母親の病の床に法然房の代わりに祈祷にいったのが、娘とのそもその馴れ初めとか」

「われらもごく最近、法然房の身辺を調べてやとと判明したようなことでございまして、やとと今、お上に奏上することが出来た次第でございます」

「親鸞は元は天台僧。しかし天台の修行が辛うて逃げ出した男でございます。娘を手なづけるのも早かったとか」

太鼓もちたちは口々に言い立てた。

十八

「親鸞は師匠の前に出て、この親鸞は独身では念仏が称えられませぬ。妻帯して念仏を称え、往生の道を辿りとうございます、と申し出たといひます」

「ようもまあ、ぬけぬけとのう。出家在家の区別無し、という師匠の言質をとって詰め寄

ったのよ」

一人が言った。

「法然房とて許さぬわけにはいくまい」

他の一人が言った。

「それに親鸞という僧名にございますが」

一人の太鼓もちがいった。

「通常、弟子は師匠の一字を貰うてわが出家名として励むものでございます」

「親鸞とは聞きなれぬ僧名であるの。気になつておったのだが」

苦りきった顔で後鳥羽がその太鼓もちに顔を向けるといった。「親鸞とはどういう謂われか」

「それが……」

太鼓もちは顔を左右に振って嫌悪の表情を大げさにみせながら、

「天台を降りた後、法然房はあの男に源空の一字を与えて綽空と名乗らせていたそうでございます」

「ふむ」

「それが、兼実の娘を娶ることになったあやつは、兼実の婿であるからには綽空の名は不足じゃと言ひ出した由」

「何とふざけたことを」

後鳥羽は怒りのあまり思わず腰を浮かせ、太鼓もちたちは口々に言ひ立てた。

「詳しい調べはまだついておりませんが、何でも浄土教の始祖の一字が欲しいと言ひ立てて、親鸞と勝手につけて法然房に許して貰うたと申します」

「いやはや何ともあきれ果て、もはや言ひようがありませんな」

一瞬、太鼓もちたちの言葉が途切れた。

「—それにしても、そんな男をあの兼実がよう許したものよ」

青筋を立て、苦虫を噛みつぶしたような顔をして吐き出すように後鳥羽は言った。

「月の輪殿は外に出来て父親の愛も薄く、母親さえ失った娘を哀れがって、娘の願いを聞き入れたとか」

「外に出来た娘なれば、本邸に引き取ること出来ませんからな」

唸るように怒りと憎悪を表情に浮かべている上皇の顔を見て、その心が極刑に傾いていることを察した太鼓もちたちは、口々に叫んだ。

「死罪じゃ。仏の道とお上を、かくまで畏れず振る舞ったとは、安楽・住蓮同様、死罪に相当しましょうぞ、お上」

その夜、一人の公卿が密かに仙洞御所（上皇御所）を訪ねていた。

九条兼実であった。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会



●古

〔特選〕古き事熱く語りてうなぎ焼く

山口 信子

うなぎ屋ならうなぎ屋の、家庭なら家庭の様子が見えてこよう。「古き事」もうなぎに関わること、あるいはほかの思い出など、すべて読み手の読みように任されている。「熱く」に作者の思い入れを汲み取ろう。

〔佳作〕美しき古語ふたつみつ葛の宿

内藤 隼人

古靴の紐のはつれや秋の雨

三宅 月彦

古井戸の蓋がっちりと草の花

増田 信子

●語

〔特選〕秋の夜やひそひそ語る長電話

浜口 佳春

人に聞かれぬようにひそひそ話している、その相手は恋人とするのがよからうが、いろいろ別の相手を置いてみるのもよからう。い

つまでも長々と話しているのは、秋の夜長と
いうこともあるのだろう。

〈佳作〉

説法の語尾に尾緒や萩の風

佐藤 雅子

語り部の抑揚はげし蘇鉄の実

山口 東人

語り部の表情豊か十三夜

石原 新

●自由題

〈特選〉

敗荷に風ごわごわと吹くばかり

齊田

仁

大輪の花を誇っていた蓮も、葉が枯れてく
るにつれて花床の重みに堪えきれず、次々と
折れて、刀折れ矢尽きの様相を示してくる。
そういう蓮に風が吹いているのだ。正に「ご
わごわと」がふさわしいと思われる。

〈佳作〉

露天風呂いずこか香る金木犀

森 弘三

出揃いて畦赤き帝曼珠沙華

井村 善也

顔に照る夕陽の温み鳥渡る

中村 真一



誌上句会〈編集部選〉

■古

秋寂ぶのいしぶみひそと古戦場 佐藤雅子
太古よりここに穴あり神無月 千駄木敏郎
秋晴れの棒を抜いたら古戦場 濱野具円
秋の夜の古書店に人吸い込ま 井口 栞
ひんやりと鈴虫の声古詩なぞ 袴田阿形
古井戸を覗きて秋の暗さかな 工藤 掉
古伊万里にレモンの並ぶショールーム 山口東人
古代米ほのぼの移り茜空 石原 新
木曾谷の古りし旅籠や虫の声 さとうゆう

■語

やまもの木のなか鳥語はげしくなり 濱野具円

浄土誌上句会のお知らせ

兼題

季節ではありません

海鳥自由題

締切・二〇一一年十二月二十日

発表・『浄土』二〇一三年二・三月号

選者・増田河郎子(「南風」主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

日本語を片づけている菊日和 小林苑を
羅漢私語かわせば秋の雨となり 三宅月彦
擬態語のくすぐったくて十三夜 工藤 掉
ボソボソと隠語で歩く茸山 井口 栞
異国語にときどき木の実落ちる音 一場宣子
野菊には妄言芒には隠語 鍋谷宗治
明晰で語順正しき秋思かな 三島 治

■自由題

ラ・フランス子に好き嫌いありやなし 佐藤雅子
大遠忌友の導師に我れ涙 飯島英徳
家系図の先頭にいる冬の蠅 山口東人
秋冷の両耳というのぞき穴 濱野具円
ぬめぬめと十一月の冷蔵庫 西原規夫
息吸えば吐かねばならぬ文化の日 工藤 掉
叢を少し突き出す野菊かな 長谷川裕
地響きのして秋麗の鼓笛隊 村田恭子
三階は紅葉の見える喫茶店 井口吾郎
古本屋の奥の暗がり黄落期 一場宣子
冬浅し猫の目にある力かな 鈴木真理子
雑炊のような古書店のおじいさん 笠井亜子

さっちゃんね

かまちのひろ



かまちひろ先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日々新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日々新聞・新日本海新聞・山形新聞・長崎新聞・岐阜新聞・以上朝刊。中国新聞・神戸新聞、以上夕刊)



編集後記

萬水に浮かびし月を仰ぎ見る

岱潤

今年がやっと終わろうとしています。この元祖様法然上人の八百年大遠忌の御年が、まさかこのような年になるなど、誰が予想したことでしょう。

三月十一日以降、日本は確かに変わりました。地震、津波に依るおびたしい数のサドンデス（突然の死）の悲しみは今なお尽きることなく。唯々念仏の中に沈み込むだけです。そしてそれに続く原発事故のもたらした放射能は、今もなお音もなく、臭いもなく、色もなく、そして生きる者に対してのスロー・デス（時間をかけてやってくる晩発性の死）に

我々は震え続けるしかありません。

人々のボランティアなどに見られる優しさ、自分の家族だけを優先させる独善性という人間の両極面を我々は見続けています。本誌が出る頃には発表されているでしょうが、今年の一字は、「震」ではないでしょうか。今年我々は「地震に震え、寒さに震え、そして悲しみに震えました」。

念仏を称えながら、我々は御遠忌を終えて、先に進まなければなりません。

十一月に訪れた大船渡の仮設住宅で出会った八十五歳のおばあちゃん、この八月に書いたという明るい、穏やかな海の絵を私にくれました。仮設の人々にはも

雑誌『浄土』

特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(大本山清浄華院)
臈博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

う前を見て明るく生きていました。これが東北人魂なのだそうです。心をチェンジさせるために正月があるのでしょうか。十二月中にしっかりと整理をしておきましょう。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤光道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十七巻十二月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷 平成二十三年十一月二十日

発行 平成二十三年十二月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四・七、四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三)五七八六九四七
FAX 〇三(三三)五七八七〇三六
振替 〇〇二八〇・八・八二二八七

嵯峨二尊院

二尊院は、法然上人がお念仏の道場とされ、その後お弟子の湛空上人が再興されたお寺です。法然上人滅後16年目に、粟生の光明寺で御遺骸が荼毘される前に一次安置され、また荼毘ののち分骨された霊地であります。お釈迦さまはお念仏をしてこの世からお浄土へ往生することを勧めら

れ、阿弥陀さまはお浄土から私たちを導いてくださいます。この釈迦・弥陀の二尊がおまつりされていることにより、二尊院と呼ばれています。法然上人の代表的な肖像の『足叟の御影』がまつられています。

国宝「法然上人行状絵図」より



総本山知恩院蔵

法然上人鑽仰会の

本

当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036

こうるじっぽう 響流十方 其の二

袖山榮輝・林田康順・小村正孝

法然上人鑽仰会

響流十方こうるじっぽう
其の二
640円(税別)

響流十方こうるじっぽう
600円(税別)



在庫
僅少

月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円(税別)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)500円(税別)



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より